

別紙1

陳述書

小田 成

インタビューアー 三谷 鞆彦

1、経歴

——まず、小田さんの略歴をお聞きます。

小田 私は1935年、新潟県に生まれました。国立弘前大学文理学部を卒業後、青森放送に勤務。1964年退社後、幾つかの広告代理店勤務を経て、1972年、表参道で独立しました。コム・クリエイティブ3を名乗って、広告・宣伝に関する企画・制作にライターまたはコーディネーターとしてかかわってきました。また、企業出版物、社史、一般書籍（単行本）のライター（取材・インタビューを含む）やコーディネーターをつとめてきました。

——朝日新聞が、ASA（朝日新聞サービスアンカー）を通じて毎月購読者に配布している「朝日ホームスケジュール」も、小田さんのお仕事ですか。

小田 はい、そうです。朝日新聞社とは、特に仕事のご縁が深く、1976年、朝日新聞社月刊情報誌『朝日家庭便利帳』（現『暮らしの風』）の創刊とともに1984年まで、そのコーディネーターとして、制作実務にあたりました。

また、1990年からは、朝日新聞社月刊料理情報誌『家庭と朝日新聞』（現『朝日クッキングサークル』）の制作にも携わってきています。

『朝日ホームスケジュール』（カレンダー）の仕事は、2001年1月号から制作を受注。提携するコム・クリエイティブ2の亀谷進をアートディレクターとして、毎月制作しております。

2、『朝日ホームスケジュール』に故三谷一馬の絵を使用した経緯

——2006年1月から現在まで、毎月の『朝日ホームスケジュール』（これは、最高裁に参考文献として理由書に添付しましたが）に、父、三谷一馬の絵を使っているのですが、もともとどういう経緯で父の絵を使用することになったのですか。

小田 『朝日ホームスケジュール』は、受注した年から5年ほど、アートディレクターの亀谷進の野菜を主体にしたフォト・イラストレーションで毎号制作してきました。以降は、毎年秋に、翌年の図柄案を朝日新聞宣伝PR部にプレゼンテーションし、採用された案で、年間12枚を制作するしくみです。

三谷一馬氏の絵「江戸の物売り」で2006年分を制作したいと強く推したのは、アートディレクターの亀谷進です。ほかに、例えば私が親交のある日本画家牧進氏の『日本の色』案

なども提案しましたが、「絵の構成力や完成度といい、色の美しさといい、三谷氏に優るものはない」という亀谷の主張が通り、「江戸の物売り」で行くことが決まりました。

——それで、私のところに、父の絵の使用許諾の申し入れをされたわけですね。

小田 はい、そうです。私どもは、どこかに「朝日新聞」という看板を背負って仕事をしています。いかなるときにも、あいまいな形で何かを使うということは、考えたことはありません。

——ところで、父の絵を収めた本には、それぞれの絵に父が模写した原画の作品名や作者名が書かれていて、原画が何かが分かるようになっています。もしカレンダー制作費を安くあげたかったら、著作権の切れた原画を使えば、いちいち著作権者の許諾を取ることもなく、なおかつ無料で自由に使えるというやり方が考えられますが、そういうことは考えませんでしたか。

小田 まったく考えませんでした。

——どうして、考えなかったのですか。

小田 カレンダーには、アート性が必要です。その点で、原画と三谷一馬氏の絵との間には大きな違いがあります。私たちは、三谷一馬氏の作品（絵）の美に惹かれ、それをもって『朝日ホームスケジュール』を作成したいと思ったのであり、原画で制作したいと思ったわけではありません。

——著作権が切れた原画ではなく、わざわざ著作権の許諾を取るという手間をかけ、なおかつそれ相応の使用料を払うというコストをかけても父の絵を使おうと思ったのはどうしてでしょう。

小田 前の答えと重なりますが、三谷一馬氏の絵は、原画とは違います。原画から発想を得られ、時代性などを精緻に写そうとはされていますが、それにプラスされた三谷氏の個性があり、クリエイティビティがあります。かつ、仕草の一つにまで、丁寧な検証が加えられています。その点で、三谷氏の絵は、その個性を通して創出された、一つの作品です。ですから、12枚を組んだとき、一つの世界がそこに誕生します。私たちは、だからこそ三谷氏の絵で、カレンダーを作りたいと考えたのであり、アートディレクターの亀谷進がプレゼンテーションの席で強く推したのも、三谷氏特有の線や色の美しさ、絵としての完成度の高さでした。

また、仕事に原価はつきものであり、これまでの長い間、制作者に代価を払わずに使用するということを一度もしてきませんでした。本当に低額な制作費の中で仕事をしてはいますが、払うのは当然と考えています。

3. 『朝日ホームスケジュール』に使用された故三谷一馬の絵に対する感想

——2006年1月から現在まで、毎月1点ずつ『朝日ホームスケジュール』に使っていただいているのですが、小田さんの目からご覧になって、ここで使われてきた父の絵全体に何か一貫したものを感ずることが出来ますか。

小田 もちろん、三谷氏ならではのトータライズされた世界を感じます。カレンダーというのは各家庭で毎月定位置に掲げられ、スケジュールを書き込むという実用性に、部屋のアートとなるという性格をプラスしています。毎月違う絵を使うというカレンダーもありますが、それはそれで一つの企画性をもって組まれています。

三谷氏の絵は、朝日新聞の読者に好感をもって迎えられ、電話などによる感想や問い合わせが増えていると聞いています。その一例が、年の半ばから読者になり、この『朝日ホームスケジュール』を手にした人から、前月までの分を欲しいという要望もあるそうです。それは、読者が三谷氏の絵に、好ましい一つの個性を読み取っているからだと思います。私はこの1年あまり、仕事上で何度も何度も三谷氏の絵と原画に接してきましたが、原画はあくまでも三谷氏の発想源であり、絵は、それに余人では想像できないほどの検証の数を加え、何よりも氏の感性と技術を加えて創出された美の世界だと思っています。

また、それだからこそ、朝日新聞が、2年続きで採用したと考えております。

以 上

平成19年3月6日

東京都板橋区

小 田 成 